

社會と文化の關係

難波紋吉

一序論

文化人類學乃至社會人類學に於て使用されている文化の概念は、常識的意味に於ける文化の概念、即ち限定された意味に於ける狹義の概念や、また通常、歴史や文學等に於て用いられている概念と著しく異なるものとなつてゐる。人類學的文化概念は、文化を、實體的・非實體的な全體としての人間環境のうち、特に人間によつて意圖的に創造された部分の諸様相を包攝する。いわば、この場合、文化は、優れて特定の間集團の生活様式であると理解されるのである。

近來のアメリカに於ける人類學的研究は、必ずしもその凡てがその研究領域を文化に限定してゐるとはいえない。たとへばロイド・ウォーナーやその協力者の研究のあるものは、優れて人類學的方法による共同體の研究であり、マードックの研究は、社會學、精神分析學、行動心理學及び人類學等の研究業績を利用する、文化の横斷面的・比較的檢討なのである。更により多くの人類學者は、文化と心理との關係、とりわけ人格の研究に集中し、ある

ものは生物學と人類學の中間領域に關心の重點を置き、更に自然的環境を文化の發展の重要な條件的乃至限定的因素と見ているのである。併しこれらの諸傾向の發出にも拘らず、文化は依然としてアメリカ人類學の中樞的課題である。この點に於て「血族關係」(Kinship)及びこれと直接的に結ぶ諸問題のあるもの、たとえば、結婚、財産、政治等とその課題とする英國の社會人類學と著しく異つてゐる。²⁾アメリカに於ては、民族學者、民俗學者、人類學的言語學者、考古學者及び社會人類學者にとつて、文化は常にその出發點であり、また問題の焦點である。併し現在用いられている文化の概念は多岐多様である。そのあるものは極めて複合的であり、他のものは單一または少數の文化要素を強調することによつてより正確であるが、これらの點については、既に多少とも觸れたところであるから、⁴⁾その反覆を省略する。この場合、私は特にルス・ベネダイクトの文化に關する見解が、この論文の出發點に對して極めて示唆的であると考へるので、これを手がかりとして論述をすすめる。

ベネダイクトによれば文化は人々を結合するところの重要な因素であるといふのである。このような考へ方の特質はクラックホーンも稱讚しているように寔に洞察的であるし、また示唆的である。勿論、「文化は人々を結合する」という規定は、記述的・包括的な表現であつて、決して原理的・一般的なものとはいへない。而もこれは文化の本質に觸れるところの何ものか含蓄しているのみならず、またこの極めて簡明な表現は、文化の動態の様相にも觸れているのである。

文化は、人間を爾餘の生物から差別して、單に動物としての人間をして眞に人間たらしめるところの分化的因素である。同時に、文化は人間と人間とを相互に結合して社會關係をより鞏固なものたらしめるところの「社會的セメント」である。更に、文化は人間の結合を擴大することによつて、一方、人間の社會化の促進に貢獻する

とともに他方、人間の社會生活に秩序と統一を附與する。蓋し一般的に社會の秩序も統一も、社會の成員が、それぞれ個別的・恣意的に行動するのではなくして、一定の慣習、或は行動様式に従つて行動する場合にのみ可能となるからである。いわば一定の行動様式としての文化を媒介として行動する場合、始めて可能とされるころのものである。それのみではない。もろもろの文化素型または要素、及びこれらのもの多様な複合的構成からなる文化複合、更に一層高次の文化複合はその全體性に於て、特定の社會に於ける全體としての生活様式を形成するが、これが社會の成員によつて共有されていることが意識されるとき、一の集團や社會を他の集團や社會から差別するところの最も重要な因素となるのである。

文化を發生論的に考察するとき、マリノウスキがまさしくも述べているように、これは「本能の抑壓」に始まるものであるかも知れない。⁵⁾ また文化は宮島肇が強調するように「自然的・本能的生命の自己形成活動の産物」であるかも知れない。いづれにせよ、文化は、明に人間の社會生活過程に於て共同的に創造された所産としての被創造物であり、一の世代から他の世代へ學習過程によつて傳承されるのであるから、社會的・客觀的に實在するものである。また内部的に制度化されたものであるから、個人の生活や行動の内外に働く存在となる。文化が個人の行動や生活をそのよう、らんから墓場に至るまで規制し、決定し、方向づけるというのは、かかる意味に於てである。⁶⁾ それ故に「個人の經歷は、先づ第一に、何ものにも優つて、傳統的にその共同體から繼承されたところの行動型相や行動規準に對する順應調和」なのである。

社會の根本原理が、究極的には、結合に存するという認識は、多くの社會學者及びその他の學者によつて等しく承認されているところである。⁷⁾ 併し人間結合の本質を形式社會學の主張のように、社會生活の内容から抽象さ

れたところの社會生活の形式としての心的相互作用に求めることが出来るであらうか。この場合、社會の本質を社會の形式に求めようとする方法が、餘りにも非歴史的・非現實的にして空そなものであることは、既に文化社會學者によつて鋭く批判されていることを、想起すべきである。更に社會の發展を人間結合の時間的・空間的擴大・強化として理解するとき、これを推進する因素の問題は重要である。この問題に關する經驗的・實證的研究は、それが生物學的因素または心理學的因素であるよりも、むしろ文化的因素に基くところが多いことを立證しているのである。

人間の社會生活の歴史を顧るとき、社會と文化の關係は、複雑多岐にわたつて交錯しており、事實上、不可避的・補足的關係にあることが、近來の人類學的研究並に社會學的研究によつて明にされている。¹⁰⁾人間の結合もまた社會の發展もともに、生物學的或は心理學的因素と決して無關係であり得ないことは、何人も否定し難いのであるが、他面に於て、人間は人類が一般的に共有している普遍的文化を通じて相互に結合し、更にそれぞれの人間が直接的に所屬する個別的集團や社會の独自の宗教、藝術、學問等の如き精神的文化や、道具、機械、交通・通信手段等の如き物質的文化、及び慣習、制度或は技術等の如き行動的文化の複合體としての文化、即ち特定の生活様式の影響の下に置かれているのである。このように社會と文化との關係は、現實の社會生活に於て、著しく錯綜しており、事實、不可分離的關係にあると考えられる限り、これらの兩者はそれぞれ獨立せるものとして、個別的に考究する必要があるとともに、その全體關聯的研究もまた重要となる。何となれば、かかる全體關聯的把握方法によつてのみ、始めて全體としての社會は勿論のこと、それぞれの文化要素を歴史的・現實的社會に即して理解することが出来るからである。ことに人間の社會または共同生活そのものを研究對象とする社會學があ

り得るとともに、社會と文化との關係を全體關聯的に把握することをその課題とする科學としての文化社會學、即ち文化を指向概念として社會を科學的に究明・理解しようとする社會學が存在し得る所以があるのである。

二 文化社會學の地位

文化社會學は、いわば二つの異つた領域にまたがる學問である。即ち社會をその研究領域とする社會學と文化の科學的究明に専念しようとするところの文化學との混合によつて成立する學問であると考えられる。従つてその學問的性格も、研究對象も、更にその方法も當然にこれら兩科學の直接的影響の下に置かれざるを得ない¹¹⁾。そしてかかる二重的性格のうちに、學問としての文化社會學の地位の決定に關する多くの困難な問題が伏在しているのである。

文化社會學を、廣義に於ける社會學の一部門とすることに於いては、何等の異論もないようである。併しこれを社會學の一類型とするか、一學派と見るか、或は常に社會學の特定の傾向乃至方針を代表するものに過ぎないと考えるかについては、異論があるのである。¹²⁾ 文化社會學は、精々四・五十年の歴史しか持つていない若い學問であるから、完成された社會學の一類型を代表するといふよりも、むしろ様々の類型をそのうちに包攝しながら新しい社會學を形成しようとしているところの一の傾向であり、従つて一の學派であるといふよりも一層廣義の社會學の部類であると考えられる。それ故に文化社會學は現在のところ社會學の一つの有力な傾向または方針に過ぎないものと考えるのがより適當であるであらう。

次に文化社會學を、社會學史的見地に於て考察するとき、これはコント社會學以後に發達して來た社會學の最

近の發達段階を代表するものようである。最初いづゆる「綜合社會學」として出發した社會學は、「形式社會學」の段階を経て、現在では、大體に於て文化社會學という名稱を使用すると否とに拘りなく、實質的意味に於て「文化社會學」的研究の方向に漸時進んでいるように見える。この傾向は、また社會學方法論に於ても同様に見られている。コント、スペンサー、ローレンツ・フォン・シュタイン及びウォード等によつて提唱されたところの綜合社會學の方針は、ドイツに於ては、テンニース、ジンメル、フィアカント及びフォン・ウイーゼ等によつて代表される形式社會學 (Formale Soziologie)¹³⁾によつて否定され、特殊的社會科學の一としての形式社會學の方針によつて代置されたのである。そしてこの方針は、特に獨逸社會學を中心として顯著に現れ、わが國に對しても同様の影響をもたらしたが、傳統的に綜合社會學的傾向の強いアメリカ社會學に對しては、その影響は必ずしも強くはなかつた。

形式社會學は、専ら社會學の學問的地位の確立の問題、即ち社會學の對象と方法の究明に力を注ぎ、社會の本質または「社會學的なもの」(das soziale)の理論的把握に努力を集中した。換言すれば、社會の形式としての人間と人間との間に於ける心的相互作用を社會の本質と見、社會學は歴史的・社會的實在 (historisch-gesellschaftliche Wirklichkeit)のこの側面を特にその對象とする科學であると規定した。かかる見解によつて社會學は、綜合社會學の場合に於けるよりもより明確な研究對象を與えられたとともにまたその方法をも確立することが出来た。かくて社會學は、その學問的地位をより鞏固にすることが出来、いわゆる學問上の市民權を獲得するに至つた。けれども、その對象が社會の諸内容から論理的に抽象された社會の形式であつたことは、その學問的性格を著しく非歴史的・非現實的・非内容的なものにした。それ故に文化社會學は、社會の歴史的、現實的、内容的側

面とつながりを持つ社會學的研究を強調し、「文化」を指向概念として社會の理解に當るか、若しくは「社會」との關聯性に於て文化を理解しようとする社會學の方針としての知識社會學や文化社會學の立場から鋭く批判されたのである。このような意味に於て、文化社會學は、第三の社會學として登場したが、その方法は主として綜合社會學の方針であるから、これは新裝せる綜合社會學であるといわれている。¹⁵⁾

アメリカに於ては、人間の心理を貫く一般的・形式的因素、即ち心理學的要素と、心理學的方法によつて、社會または社會現象一般を説明しようとするいわゆる心理學的社會學が傳統的に優勢であつたが、人間の心理的要素は、その長い歴史的時代を通じて、相對的に不變的因素であることが明にされるにつれて、これのみによつて社會の歴史的・動態的側面が説明され得ないことが、文化の規定的役割の重要性を強調するところの文化人類學や文化社會學の研究によつて鋭く指摘されまた示唆されたのである。¹⁶⁾かくて社會現象の説明に於ける文化的因素や文化概念の重要性を強調する文化社會學は急速な發展を遂げるに至つたのである。少くともこの立場は、多くの學者によつて承認されるようになった。このような傾向は、フランスに於ては既にデュルケイムとその學派のうちに、見られたところであり、¹⁷⁾英國に於てはマリノウスキーやリッチャーズ等の「機能學派」(functional school)の研究にその顯著なものが見られるのである。¹⁸⁾

文化社會學の出現の時期は、ドイツに於ても、またアメリカに於ても、大體、第一次世界大戰以後のことに屬し、ほぼその時期を等しくしていたことは、極めて興味深いことであるといわねばならない。併しその内容がドイツのものと、アメリカ、フランス、英國に於けるものと著しく異つてゐることも、また興味深いことである。一般的に、ドイツ文化社會學を貫く性格は、歴史哲學的または文化哲學的傳統のそれに沿うものであるが、アメ

リカ、フランス、英國のそれは多分に文化人類學、または社會人類學の方法や研究によつて影響され、従つて後者に於ては、文化人類學や社會人類學に於ける研究方法、特に實態調査 (field work) の成果としてもたらされる諸事實が、抽象的理論よりも一層尊重される傾向にある。併しこれらの兩者とも、それが廣汎にわたる文化の如何なる側面または分野の研究であるかに關しては、この研究と既存の隣接科學との研究領域が相互に入り組んで微妙な關係を呈しているがため容易に決定し難く、従つて方法論上の幾多の困難な問題を殘していることは、いふまでもないのである。

三 文化に關する諸見解

文化社會學が、文化と社會の聯關性に於ける社會學である點に鑑みると、それは當然に二重的性格を有する社會學となることは前述の通りであるが、その研究の課題は優れて文化である。従つて文化社會學に於ける文化の概念規定の問題は、文化社會學にとつて最も基本的な問題であり、また最も重要な問題である。次に文化に關する諸見解のうち、その重要なものについて概括的検討を試み、文化社會學に於ける文化概念を明にしたいと思ふ。

(一) 先づ第一に文化を價值概念として規定する見解がある。この見解の一般的特質は、文化を「價值實現の過程」若しくは「人類の理想實現の意圖乃至行爲の加つた現象」¹⁾と見る點にある。この見解によれば、文化は何らかの人間の力を加えることによつて一定の目的を理想に指向せしめる過程であるか、或は與えられた事實を一定の規準に照して支配したり、形成したり、或は究極的には、その理想を實現しようとする過程の總稱である、と

考える。換言すれば、文化は人間と一應對立的關係にある自然に對して人間が自らの力を加えたり、或はこれに働きかけて、これを人間の目的や理想に接近するように變改する過程を意味することになる。従つてこの場合、この過程を通じて生れ出るもろもろの所産は、文化そのものであるよりは、むしろ「文化財」であるといわれている。そしてかかる過程に對して一定の方向を與えるところの規準がいわゆる「文化價值」であり、この價值に照して凡ての文化が評價される。この種の見解が、價值評價の問題に對して極めて重要な意義を有することは否定されないけれども、これが文化の客觀的・實在的把握を怠り、唯に文化を主觀的・價值的なものとしてのみ把握しようとし、更に文化を精神的內容のみに限定しようとしていることは、承認しがたいのである。少くとも、經驗科學としての文化社會學の立場に於て、かかる見解をそのまま承認することは出来ないのみならず、更に文化をこのような狭い見解に導く立場は能う限り避けねばならないのである。經驗科學としての文化人類學や文化社會學は、文化を價值的評價の立場から離れて、むしろ實在的立場に於て、文化の發達程度または段階とは無關係に、いわば文化が高度文化たると未開文化たるとに拘りなく、これを一樣にありのままの姿に於て把握すべきである、とする方針をとるのである。

(二) 次に文化を個人心理學的立場に於て規定しようとする見解がある。マクドゥガルの形而上學的概念としての「集團心」(group mind) は問題外とするも、文化を主觀的立場または心理學的立場に於て取扱うとする方針は、アメリカに於てかなり強い傾向である。たとえば、フロイドの精神分析學とその學派の影響下にある學者が行動のみならず、文化をも「無意識的機構」(unconscious mechanism) の作用に環元して説明しようとする方針、特に性欲としてのリビドウ (libido) によつて説明しようとする汎性欲説 (Pan-sexualtheorie) は餘りにも有名である。²¹⁾

またフロイド・オルポートやその流を汲む學者が、文化を個人的行動にまで環元し、究極的にはその表現として、特に個人の諸環境に對する調整手段として説明しようとする試みは、現在のところ必ずしも有力とはいえないが、而も注目を怠つてはならないところの一の傾向である。²²⁾ オルポートとは多少その行き方を異にしているが「文化の能動的運載者、保全者、または原動力」として個人の行動の重要性を認識し、文化の經驗的分析はすべて個人の行動の段階に於てなされねばならないと主張するものにリンドがある。²³⁾ 次にこの種の見解をより體系的に展開したものととしてブルーメンタールが擧げられるが、彼は文化を過去・現在に於ける「文化意識」(cultural consciousness) と「亞文化意識」(sub-cultural consciousness) からなる心的状態としこの「文化心」(cultural mind) の總體であると規定し、文化を純然たる心理的狀態に歸せしめている。²⁴⁾ 更にブルーマーを中心とするいわゆる象徴的相互作用論者 (symbolic interactionists) は、特定の慣習や傳統或は社會制度等が、特定の集團の成員によつて分享されているのは、成員間に共同的象徴が存し、これによつて人々の間に於ける行動が相互に期待し、また期待されるという關係にあるためであるという。同様に様々の行動様式も象徴的相互作用の媒介によつて成立するのであるから、ここに文化を説明する一の鍵があるといふのである。²⁵⁾

この外にも幾多の心理學的文化概念があるであろう。これらのものの一般的立場やその特殊の形態に對する文化社會學の立場からの批判は、心理主義と文化主義の對立という形態に於て現れ、その論争は今も尙續けられている。然るにこれらの立場の中間にあつて心理的因素と文化的因素とを併用しようとするところの折衷論的試みも決して少くはない。²⁶⁾ 尙また、フロイドとその學派の文化の説明に對しては、ウィツスラー、マリノウスキー、及びゴールデンワイザー等によつて、かかる説明が必ずしも事實に合致するものでない、と鋭く指摘されてい

る。オルポートの「集團謬誤」(group fallacy) 論やリンドの主張に對しては、マーケイ等の批判に見られるように、最早今日では社會學者の間にその支持者を求めることは殆んど困難である。ブルーメンタールの文化心の概念は、極めて示唆に富むようではあるが、それは餘りにも觀念的であり、彼自らも批判しているところの「人間性」、「物質的文化」、「人格」及び「目的心」の概念が漠然たるものであると同様に、不明確であり、單に全體としての文化の一要素を指摘したに過ぎないのである。

これを要するに、これらの見解は、文化の一要素または一側面を觀念的・抽象的にとらえ、これを一方的に強調してその特質を明確ならしめるといふ、有利な點を有しているけれども、かかる方法によつて文化の全般に關する説明を求めることは出来ないのである。更にこれらの見解が、ともすれば、文化の客觀的・超有機的側面、特に物質的文化を看過し勝ちであり、また心理學的原理を越えて作用する集團的原理を無視する傾向にあることは、われわれの承認し難いところである。

(三) 第三に文化を人間の集團生活または社會生活過程に於る共同の所産であると見、その超個人的・超有機的・超心理的特質に着目し、これを「超有機物」(the superorganic) と稱し、その客觀的實在性を強調する見解がある。²⁵⁾ スペンサー、ソローキン、クロバー、レスリー・ホワイ等がこれである。この見解は、一方に於て文化を單に價值實現の過程として理解しようとする哲學的見解と對立し、他方に於て個人的・心理學的立場を強調する心理學の見解とも對立する。この見解に於ける最も重要な問題は、社會の所産としての文化とこれを生み出す社會との關係のそれである。人間の社會は、發生論的には、人間の無數の自然的欲求、慣習的欲求及び想像的欲求等の如き無數の欲求の充足という必要に基いて形成され、且つ組織されているのであるから、それは個人的。

社會的欲求を充足するための複雑な社會體系であると見做される。この體系のうちにある個人は、多少とも、意識的・無意識的に、或は形式的・非形式的に多岐多様にわたる相互作用や相互關係に入り込み、これらの作用や關係の集合的所産として、共同の觀念、態度、慣習等が生れ、これらのものは生活のための基本的欲求、たとえば、衣食住に對する欲求や社會秩序の維持に對する要求を満足せしめる最も重要な手段となる。そのみではなく、これらのものはその長きにわたる反覆過程に於て、漸次型相化される。型相化された行動は一の世代から他の世代へ傳承される。このような行動型相の形成とともに、衣食住等の如き諸欲求を充足するために必要な種々様々の物質的器具や道具が發見または發明される。これらのものを總稱して物質的文化というのである。行動型相や物質的文化は明に社會過程を通じて形成されたところの共同的所産であるから、これは社會的所産である。ワラスやオバグーンが文化を「個人的遺傳」に對して「社會的遺傳」(social heritage)と稱している所以がここにある。「社會的遺傳」は人間社會に於ける獨自の所産であるから、ホモ・サピエンスの集團であつて、何等かの形態の文化を有せないものはないのみならず、またこれはそれ以外の生物と人間とを差別する標幟となるから、生物から人類を差別する「分化的因素」(differential factor)であるといわれてゐる。³¹⁾

スペンサー、クローバー及びソローキンは、前述せるように、文化が有機體と不可分離的關係に立ちながら而有機體を超越して、客觀的に實在する事實に着目して、これを「超有機體」と呼び、デュルケイムは諸個人の心意や意識の外部にあつて、諸個人を拘束する行動・思考・感情の様式 (manières d'agir, de penser, et de sentir) を社會事實 (faits sociaux) または集合表象 (representation collective) と稱してゐる。³²⁾ 前者は文化概念のうちに物質的文化を包含せしめてゐるに反し、後者はこれを行動様式に限定してゐる。併しその何れもが文化を社會的

所産として認識し、その客觀的實在性を強調している點に於ては同一である。

更に文化をイデオロギーとして把握しようとする立場がある。唯物史觀の立場はその代表的なものといえる。これによれば、全體としての社會は下部構造 (Unterbau) としての社會の經濟的構造 (社會的生產關係の總體) と、その構造の上にあつて、その規定性の下に置かれる關係にあるところの上部構造 (Oberbau) に區別され、この上部構造に所屬するものが社會の政治的構造や精神的・文化的諸形態としてのいわゆるイデオロギーなのである。ここに於ては文化は主として生產關係の總體としての社會の下部構造の所産またはその反映であり、かかるものとして法、政治、宗教及びイデオロギーがある。文化が常に下部構造の所産である限り、それは常に下部構造の制約下に置かれざるを得ない³³⁾。これに類似する見解としては、社會的存在による知識の被制約性 (Schneller bundenheit der Wissens) を強調するクンハイムの「知識社會學」や社會過程 (Gesellschaftsprozess) を文明過程 (Zivilisationsprozess) と文化運動 (Kulturbewegung) の基底にあるものとして、その社會構造上に於ける重要性を強調するアルフレッド・ウエーバーの知識社會學がある³⁴⁾。併しクンハイムやウエーバーの場合に於ては、唯物史觀の場合と異り、文化に對する社會的存在の規定性を決して一方的にのみ高揚することなく、文化や文明による規定性をも同時に認めようとする立場をとつてゐる。いづれにせよ、これらの見解に共通しているところは、社會と文化とを階層的または段階的に分割し、主として文化を社會の所産または反映として把握していることである。

また文化は屢々「社會制度」(social institution) と同視混合されている。社會制度は一方に於て學校や病院のような組織された集團そのものを意味することがあるが、他方に於て結婚制度、法律制度、宗教制度などといわ

れる場合のように、一定の行動型相を主として指示する場合がある。そしてこの後者は文化に所屬するものと考
えられる。このような意味に於ける制度は政治、經濟、宗教、社會等の各側面にわたつて存在しているからスベ
ンサーを始めとして、多くの學者、たとえばホップハウス、ジャッド、ハーツラー、ハミルトン、バーラード等
の如き學者によつて、恰も文化を代表するもののように取扱われている。併し一般的に文化は精神的文化並びに
物質的文化をもにそのうちに包含するところの、いわば制度よりも、一層廣汎にわたる内容を包攝するもので
あると考えられるから、この見解の妥當性は限定的なものといわねばならない。

(四) 最後に文化をその全體性に於て、即ち一般的に精神的文化及び物質的文化と稱せられるものとともに、行
動的文化及びその他の文化要素をも——もしあるとするならば——そのうちに包含するところの複合的・全體的
生活様式として全體關聯的に把握しようとする見解がある。この見解は傳統的には文化人類學者に歸せられ、ま
だ代表されていると考えるから、これをかりに人類學の見解と呼ぶこととする。この見解はクラーク・ウィッス
ラーによつて、その名著「人間と文化」(一九二三年)に於て展開された。ここでは文化は「特定の民族の生活様
式」(mode of life of this or that people)であると規定されている。この定義は敘述的であるが、その特質
は、文化を價值的觀點から離れて、實在的立場に於て、特定の文化をその社會の生活様式として全體的に、即ち
全體關聯的に把握するにある。この立場に於ては文化と文明とを本質的に異なる二概念として區別する立場を避
け、これを單に量的若しくは相對的差異に過ぎないと考え、従つて生活様式としての文化は社會の發達段階の上
下優劣とは全く無關係に、どのような部族や民族に於ても存在すると見るのである。文化はエスキモーやホツテ
ントットの如き未開人の社會にも、またフランス人や英國人のようないわゆる高度文化人の社會にも等しく存在

する。のみならず文化の獨自性について見るならば、フランスや英國の文化が多くの文化の綜合よりなる複合的文化であるに反し、エスキモーやホットtentの文化はこれらの社會にとつて極めて本來的・獨自的なものであるからこのような意味に於て、後者の文化は前者のそれよりも一層明確であるといつてよい。³⁷⁾

ウィットスラーのこの文化概念は、近來多くの英米の人類學者、心理學者及び社會學者によつて踏襲されているところである。その説明の仕方や術語の使用に於ては、勿論多くの異なるものがあるが、優れて英米的なものとして代表される傾向にある。ウィットスラー以前に於て、既にサムナーの有名な「習俗論」³⁸⁾が文化社會學乃至文化人類學の先驅者として出ており、デュルケイムの集合表象論が英米の文化概念の形成に對して與えた影響は少くなかつたと思われるが、その何れもが人間の行動様式または生活様式の究明を強調していることは、興味深いことである。併しウィットスラーの見解は、アメリカン・インディアンの歴史的・社會的生活に關する人類學的實態調査に基くところの實證的なものであることに於て前者の文獻的・觀念的なものと著しく異つてゐる。むしろこれはマリノウスキーの慣習論と相通するところの多くのものを持つてゐるようである。⁴⁰⁾この外、生活様式としての文化は、特定の集團の人々の全體としての「生活の仕方」(way of life)、「生活型相」(patterns of life) また「生活設計」(design of living)とも稱せられてゐるが、この様な見解は漸次英米の人類學者や社會學者の間に於て常識的・一般的なものになりつつある。⁴¹⁾この生活様式としての文化概念は極めて廣義のものであるから、一層立ち入つてその詳細について検討せねばならぬ。

四 生活様式としての文化

マリノウスキーは「文化は本來生物學的諸欲求の充足ということから生ずる」⁴³⁾と求べているが、かかる欲求の充足は、多くの場合、個人によつて個別的に行われることは殆んど稀であり、太古より現在に至るまで、むしろ社會過程を通じて行われているのである。多くの人々の協力や競争、或は調整や闘争等の社會過程に於て行われるのである。この社會過程に於ては自ら様々の社會的所産が生れるが、便宜上、これを次の三種類に大別することが出来る。その一は精神的文化であり、その二は物質的文化、その三は行動的文化である。文化の分類方法はそれぞれの學者によつて著しく異つているのみならず、それぞれの文化範疇に包藏される文化内容もまた従つて異つてゐる。たとえば、オグバーンは、文化を物質的文化と非物質的文化(精神的文化)に大別し、前者に屬するものとして、家屋、工場、機械、製品、食糧、物質的事物を挙げ、後者に言語、宗教、藝術、科學を所屬せしめてゐる。⁴³⁾更にこれらの兩者の間にある文化として順應的文化(adaptive culture)を考え、これを物質的諸條件に對して調整したり、或は順應するところの精神的文化の一種類であると見、これに所屬するものとして道具の使用法、様々の仕來り、慣習、信仰、哲學、法律、政治等を擧げてゐる。⁴⁴⁾これは、後に詳述するであろうところの行動的文化に類似する内容を有しているが、併し餘りにも文化の順應的側面を強調し過ぎてゐる嫌がある。従つてこれには獨立的地位を認め難いのである。次にバーナードは、文化を文化の物質的側面としての物質的文化(material culture)、物質的過程に順應するところの制度的または形式的文化(institutionalized or formal culture)及び個人的反應や習慣からなるもので他の二つの文化的環境に對して非形式的調整をなすところの文化として、非制度的文化(non-institutionalized culture)とを區別してゐる。⁴⁵⁾この分類に於ては、非制度的文化の内容が、精神的文化と如何なる關係に立つかが、必ずしも、明確にされてゐない。然るに尾高邦雄は、文化を具象

的・可視的な物質的文化と、それ自身具象的でも可視的でもないが、「財」として一定の客觀的形象性を持つ非物質的文化と、具象的でも可視的でもなく、また「財」というよりはむしろ「仕方」或は「能力」として、主體の内側にある非物質的文化とを區別する立場をとつて⁴⁰⁾いるが、この分類は妥當であると思う。

これらのオグバーン、バーナード及び尾高邦雄の分類に共通的に見られる三分法は、從來多くの學者によつて採用されていた二分法に比して遙かに優れたものがある。何となれば、物質的文化の存在については、何人も異論をさしはさむ餘地はないのであるが、併し精神的文化のうちには、この名稱の下に種々様々の文化要素が包藏されるから、これを正確に規定するためには、少くとも文化の形象的側面と型相的側面とを區別して、それぞれ個の範疇に於て考察するのがより適當であるからである。精神的文化のうちには、一方に於ては獨逸の學者によつて好んで提唱されている意味形象 (Sinngebilde) または精神形象 (Geistesgebilde) と稱せられている文化、即ち言語、學問、藝術、宗教等の如く書物、繪畫或は聖典等のうちに形象化されているところの様々の精神的文化財と、「ものの考え方」、「ものの感じ方」、「ものの仕方」、「ものの信じ方」、「價値の置き方」等のように、特定の社會の成員が、その日常生活に於て、意識的・無意識的に常に必ず従うことを社會的に要請または強制されているところの多くの行動型相がともに包含されている。そして前者をかりに精神的文化財若しくは意味形象と稱し、宗教、藝術、學問によつて代表せしめるならば、後者は、一般的に慣習、制度及び廣義に於ける技術によつて代表されているものがこれに當るのである。これらのものは、屢々精神的文化の名の下に一括され勝ちであるが、これをその本質的差異から見ても、また敘述上の便宜から考察しても、區別するのがより適當である。そして私はこの後者を行動的文化と呼びたいのである。

ところで、この慣習、制度或は技術によつて代表される行動文化は、物質的文化や精神的文化と異つて、人間の行動や現實的生活と常に直接的に結びついているのみならず、また行動や生活の中に働き込んでゐるから、事實上、行動と生活とを分離することは難しい。併しよく考へて見るならば、慣習、制度、技術等は決して個人の行動や生活そのものであるのではなく、その外部にあつて、行動や生活に一定の規準や拘束或は方向を與えるものであるから、客觀的に實在するものと考えてよいのである。

このことは、クラックホーンが説明的概念としての文化を、物理學に於ける引力の原理にも比すべき抽象的概念であり、また地勢に對して地圖の如き關係に立つものであると繰返し述べていることを反省するとき、一層明瞭になるであらう。⁷⁾更にタイラーがその廣く熟知されている文化の定義の後段に於て、「能力」と「慣習」に關説しているが、これは明に「社會構成員としての人間によつて獲得された」「能力」と、「慣習」を意味するものであるから、これらのものは決して生物學的・心理學的内容のものではなく、客觀的に實在する一定の文化的內容に外ならないものと考えられる。このような理由によつて、行動型相としての文化即ち行動的文化の概念を用いることは必ずしも不適當ではない。このことは、またソローキンも明に認めてゐるところである。

今まで述べたところを一層概括的・體系的に、次のように要約することが出来るであらう。

(一) 精神的文化というのは、精神的所産の諸體系からなる文化の總體であるが、そのうち最も代表的なものは宗教、藝術及び學問である。これらのものは爾餘の一切の文化に對して根本的意義を有する關係にあると考えられる。そしてこの根原性は、狹義の文化即ち精神的文化のみに限定された場合に於ても、また物質的文化に對する關係に於ても同様に認められるところである。この場合、宗教、藝術及び學問が、これらのものから生み出さ

れたところのもの、いわゆる所産としての宗教的、藝術的または學問的作品と區別されねばならないことは勿論であり、後者はむしろ物質的文化に所屬せしめるべきである。この外、個々人の品性を意味する教養、更に廣く民族精神乃至國民精神等と稱せられているところの文化精神、及び狹義の社會意識等もこのうちに包攝されるであろう。この場合、デニルケイムの集合表象をどの範疇に所屬せしめるべきかについては、恐らく異論が存するであろう。これを人間の「行動様式」として強調するならば、次に述べる行動的文化に所屬することになるが、これに反して、「社會意識」としての側面を強調するならば、精神的文化に所屬することになるであろう。⁽¹⁹⁾

(二) 次に行動的文化についてであるが、これは社會的に型相化された行動の諸體系を意味する。この文化のうち典型的なものを擧げるならば、それは前述せる通り慣習、制度及び技術である。これらのものは物質的文化のように具體的・可視的な文化でもなく、また意味的形象の如きものとも異り、いわばその中間にあつて、社會行動や社會生活に對して規準的行動型相となるものがこれである。慣習はこれを心理學的に解釋すれば「條件的反射の體系」であるが、社會學的にいえば、人間が社會生活に於て習得した特定の行動型相に外ならない。制度とは、慣習よりも一層固定化し、規準化された行動型相にして、社會的に承認されている體系である。併しこのうちに、家族、教會、政黨等の如き集團そのものを一般的に意味するものと解せられる社會制度が包含されないことは、勿論である。技術とは、この場合、社會的に習得されたところの「ものの作り方」、「もの考え方」、「もの仕方」、「もの信じ方」及び「價値の置き方」から、藝術上の様式または流派等に至るものを意味する。併し技術によつてスペイングラが述べているように、虎には虎の技術があり、ライオンにはライオンの技術があるという、いわゆる生物學的・遺傳的能力に基く本能的行動型相が意味されないことはいうまでもない。

次に言語が精神的文化に所屬するか、或は行動的文化の範疇に入れられるべきかについては、これまた異論の存するところである。マリノウスキはその文化の分類に於て、言語に獨立的地位を與えて、その他の文化と並列的關係に立つものと見ており、キンボール・ヤングは言語を以て「文化の凡ての他の側面に對して基本的な普遍的な文化型相である」と述べ、これに別個の地位を認めている。言語を社會に於ける人間の精神的所産と見るとき、精神的文化に所屬すべきであるが、これを機能的に考察し、多くの人間がそれによつて會話し、通信し、交渉し、理解するための、行動の形式或は「觀念を傳達するための手段」と解するとき、この範疇に所屬するものと考えられる。

社會組織を如何に考えるかは、一層困難な問題である。集團は單に多數人の集合體であるよりも、むしろ一定の相互作用や相互關係にある人々の行動體系であると考えられるから、その限りに於てそれは共通の・反覆的な社會行動の特定の種類であろう。同様に社會組織もまた一般的意味に於て一層組織化された社會行動型相の體系であると見ることが出来るであらう。

社會組織は、一般的に「組織されているもの」を意味する場合と、「組織すること」または「組織する行動(作用)」を意味する場合とがあるが、組織を動態的に考察して後者の意味に解するとき、それは結局に於て一定の社會行動に歸するのである。この様に行動型相の概念を廣義に解釋するとき、この概念のうちに、言語から社會組織に至るまでの行動型相が包含されることになり、而も全體としての文化の構成要素としては、最も重要な部分を形成することになる。文化が多くの學者によつて往々行爲の雛型、行爲様式、或は行動型相によつて代表されるもののように考えられているのはこのためである。更に文化をかかものとして理解するとき、そのうちに行

政、教育、等も包含されることになるであらう。

(三) 最後に物質的文化は、文化の物質的側面乃至事物的側面の集積またはその體系の總體である。あらゆる具體的にして實體的な人間の社會的業績がこれに所屬する。道具、家屋、武器、機械等から道路、公園、衛生施設、盆栽等に至るまでのあらゆる物質的加工物がこのうちに包攝される。また精神的文化を象徴するものとしての書籍、繪畫、聖典等もこれに所屬するであらう。この物質的文化それ自體は、前記の文化範疇と異り、文化を變改し、または創造する力をそれ自體が具有するものではないから、一般的に文化財(文化財産)或は文物と呼ばれている。

文化財は、それがつくられる場合、比較的に物質的要素に依存することが多いか、或は精神的要素に依存することが多いかに従つて、物質的文化と精神文化財に分たれる。工藝的作品や機械的製作物等は、前者に屬し、宗教的、藝術的、學問的作品等は後者に屬する。併しこれらの兩者は相互に交錯し、相關し、相互に不可分離的關係にあるから、物質的文化と精神的文化とのけじめを明確ならしめることは、決して容易ではない。従つてこのような分類は、むしろ研究上の便宜に出ずる相對的なものであるに過ぎないことを注意すべきである。

上述せるところによつて、文化が(一)物質的文化、(二)精神的文化、(三)行動的文化という三種類に分類され得ることが、一應明にされた。だがこの分類が決して満足すべきものでないことは、スペングラー、マキイヴァ及びアルフレッド・ウェーバー等の如く文化と文明を嚴密に區別する立場、或は、ウッダードのように、前記の分類を横斷するところの分類法として、歸納的、審美的、統制的文化の區別を主張するものがあることによつて明である。またその名稱が必ずしも妥當でないことは、多くの異つた名稱が多くの學者によつて使用されている事

實によつて明瞭である。併し今直ちにより適當した名稱や分類を發見し難いから、最も一般的であると考えられる前記のものに従ふこととする。

私は更に進んで、物質的文化ほど具體的でもなく、他方精神的文化に於ける意味形象の如きものでもなく、而も全體としての生活様式を構成する要素としては、最も重要な部分であつて、生活様式の根幹をなすものと見られるところの行動的文化によつて検討を加えるであらう。(續く)

- 註
- (1) Kluckhohn, C., "The Study of Culture", Learner, Daniel and Lasswell, H. D., eds., *The Policy Sciences*, 1951, p. 8f.
 - (2) Murdock, G. P., "British Social Anthropology", *American Anthropologist*, Vol. 53, No. 4, Part I, October-December, 1951.
 - (3) Kluckhohn, C., op. cit.
 - (4) 難波紋吉, 「文化の概念規定に於ける諸問題」同志社大學經濟論叢, 昭和二十六年一月號, 三月號。
 - (5) Malinowski, B., *Sex and Repression in Savage Society*, 1927, Pt. IV, p. 182.
 - (6) 宮島肇, 「文化哲學の基礎研究」, 昭和二十四年, 一七〇頁。
 - (7) Kroeber, A. L., "The Anthropological Attitude", *American Mercury*, 13: 490-496, 1928, quoted in Wallis, W. D. and Wiley, M. M., *Readings in Sociology*, 1930, pp. 11-17. *メルダールは、その名著「アメリカのネイマン」に於て、アメリカ人が高度の國家的・基督教の教訓の影響の下に考え、語り、行動するところの規準としての「アメリカの信条」(American Creed)は階級、宗教、人種等にかかわりなく、凡てのアメリカ人によつて共同的に持たれているものであり、これはアメリカと云ふ廣大な地域のうちに於ける多くの異民族からなる國家構造のセメントであると述べている。*
 - (8) Myrdal, Gunnar, *An American Dilemma*, 1944, pp. XLI-XLVII, 3.)
 - (9) Benedict, R., *Patterns of Culture*, 1934, p. 2.
 - (9) 高田保馬, 「社會學概論」, 大正十一年, 「社會關係の研究」, 大正十五年, 昭和十七年, 新明正道, 「社會學の基礎問題」, 昭和十

四年、社會本質論、昭和十七年。中野重、社會哲學的法理學、昭和八年、發展する全體、昭和十四年。Verkrandt, A., Gesellschaftslehre, 1923, 1928 等。

(11)(10) Sorokin, P., Society, Culture, and Personality, 1947; Kroeber, A., Anthropology, revised ed., 1947. 參照。
ソロキンは「社會學を「社會社會學」(Gesellschaftssoziologie)と文化社會學(Kultursociologie)とをわけてゐる者

を明瞭に區別する立場をとつてゐる。この分類は社會學の對象の問題に關する對立的主張とその止揚に關する論争を展開したが、この點の詳細については「新明正道」、「社會學の基礎問題」、昭和十四年、九一一—一〇五頁、及び松本潤一郎「社會と文化の問題」、昭和二十三年、第一章を參照。ワットは宗教社會學を、社會の研究と宗教の研究から生れた社會學的研究であると見、從つて宗教社會學は「その他の社會學とある程度までその問題を共通にしてゐるが、同時に宗教經驗や宗教表現の如き独自の問題を持つものでもある」と述べてゐる。宗教社會學と同様に文化社會學が社會と文化にまたがる社會學的研究であることは、その學問的語彙の決定に於て、様々の困難を伴ふことには勿論である。

Wach, Joseph, "Sociology of Religion," Gutwich, G. and Moore, W., eds., Twentieth Century Sociology, 1945, p. 406.

(12) 尾高邦雄、社會學の本質と課題、上卷、昭和二十四年、一三二—一四〇頁。文化社會學と稱せられる社會學のうちには「歴史社會學、知識社會學、民族學、文化人類學、社會人類學、民族社會學等の如き諸科學が、包含されてゐるから、これらのものを一義的に綜合する學問體系の樹立は、極めて困難な仕事である。

(13) 初期の綜合社會學を代表する學者とその主著は次の通りである。

Comte, A., Cours de philosophie positive, 1830—42; Spencer, H., The Study of Sociology, 1873, Principles of Sociology, 3 Vols., 1876—1896; Stein, L. von, Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage, 3 Bde., 1850; Ward, L., Dynamic Sociology, 2 Vols., 1883, Pure Sociology, 1911 (1903).

(14) 形式社會學派に屬する學者及びその主著は次の通りである。

Tönnies, F., Gemeinschaft und Gesellschaft, 8 Aufl., 1935 (1887); Soziologische Studien und Kritiken, I, 1925, II, 1926, III, 1929, Einführung in die Soziologie, 1931; Simmel, G., Über soziale Differenzierung, 1890, Soziologie, 1908, Grundfragen der Soziologie, 1917; Verkrandt, A., Staat und Gesellschaft in der Gegenwart, 1916, Gesell

schaftslehre, 1923, 1928, Handwörterbuch der Soziologie, 1931; Wiese, L. von, Allgemeine Soziologie: Teil I. Beziehungslehre, 1924, Teil II. Gebildelehre, 1929, Soziologie: Geschichte und Hauptprobleme, 1926, System der Allgemeinen Soziologie, 1933, Becker, H., Systematic Sociology on the Basis of the Beziehungslehre and Gebildelehre of Leopold von Wiese, 1932. パンク・カークの社會學を我が社會學の總論に入れたるものなり。その著者ウィーゼの著の『社会学』の序文に所屬せしむる。 Weber M., Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik, 1924.

(15) 獨逸に於ける近來の文化社會學は、次の如き學問として代表せらるる。

Weber, A., Ideen zur Staats- und Kultursoziologie, 1927, Kulturgeschichte als Kultursozologie, 1935; Scheler, Max, Versuch einer Soziologie des Wissens, 1924, Die Wissensformen und die Gesellschaft, 1926; Mannheim, K., Ideologie und Utopie, 1929, "Wissenschaftssoziologie", Handwörterbuch der Soziologie, 1931, Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie, 1932, Man and Society in a Age of Reconstruction, 1940; Freyer, Hans, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, 1930, "Typen und Stufen der Kultur," Handwörterbuch der Soziologie, 1931.

尙知識社會學といふのは、新明正徳、知識社會學の諸相、昭和七年、小松濤太郎、知識社會學批判、昭和七年、社會學研究會編、知識社會學、"Sociology of Knowledge", Gurvitch G. and Moore, W., eds. Twentieth Century Sociology, 1945, 參照。

(16) 生物學的方法を心理學的因縁と稱して文化的因縁を學初頭論したるは社會學者な次の類りである。

Ogburn, W. F., Social Change, 1929, ed. with Goldenweiser A., The Social Sciences and Their Interrelations, 1927, with Nimkoff, M., Sociology, 2 Vols, 1944; Chapin, F. S., Cultural Change, 1928, Contemporary American Institutions, 1935; Willey, M., "Society and Its Cultured Heritage," Davis, J. and Barnes, H., eds. An Introduction to Sociology, 1927, "The Cultural Approach to Sociology" with Herskovits, M., American Journal of Sociology, Vol. XXIX, 1923, "The Cultural Approach to Sociology," Wallis, W. and Willey, M. eds. Readings in Sociology, 1929; Wallis, W., An Introduction to Sociology, 1927, An Introduction to Anthropology, 1926, Culture and Progress, 1930; Dixon, R., Building of Culture, 1928; Ellwood, Ch., Cultural Evolution: A Study of Social

Origins and Development 1927; Kellner, A., *Societal Evolution*, 1927; Thomas, W., "Introduction", *Source Book for Social Origins*, 1909; Thomas, W. and Znamiecki, F., *The Polish Peasant in Europe and America*, 1927 著、邦訳あり。

何れもアメリカの文化人類學者として、専らから生物學時・心理學的社會學と稱して批判的態度をとつたものは次の通りである。

Boss, F., *The Mind of Primitive Man*, 1911, *Anthropology and Modern Life*, 1928; Wissler, C., *Man and Culture*, 1923; *The Relation to Man in Aboriginal America*, 1926; Lowie, R., *Culture and Ethnology*, 1917, *Primitive Society*, 1925, *The Origin of State*, 1927; Kroeber, *Anthropology*, 1923, revised ed. 1947; Goldenweiser, A., "Cultural Anthropology", *Barnes*, H. ed. *The History and Prospects of the Social Sciences*, 1925, *Early Civilization*, An Introduction to Anthropology, 1922, "Leading Contributions of Anthropology to Social Theory" *Barnes*, H. E. and Becker, H. eds. *Contemporary Social Theory*, 1940, 著、邦訳あり。難波敏幸「文化社會學と文化人類學」第三卷參照。

(17) チルネンハイム及びその學派の主義は次の通りである。

Durkheim, É., *Les règles de la méthode sociologique*, 1927 (1895), *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912; Lévy-Bruhl, L., *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, 1910, *La mentalité primitive*, 1922, *L'âme primitive*, 1927, *La mythologie primitive*, 1925; Mauss, M., *Mélanges d'histoire des religions*, 1903; "Essai sur le don, forme archaïque de l'échange," *Année sociologique*, N. S. Vol. I, 1923—24; Halbwachs, M., *Les causes du suicide*, 1930; *L'évolution des besoins dans les classes ouvrières*, 1932; Faconnet, P., *La responsabilité*, *Étude de sociologie*, 1920; Hubert, H., *The Greatness and Decline of the Celts*, 1934; Davy, G., *La foi jurée*, 1929, *Davy, G. et Moret, A., Des dans aux empires*, 1923; Granet, M., *La civilisation chinoise*, 1929, *La pensée chinoise*, 1924; Gurwitsch, G., *Essais de sociologie*, 1938, *Sociology of Law*, 1942. 著。

(18) 機能學派を代表するものは、マリノウスキーとラッドクリン・ノラウマンである。機能的研究は一の集團に於ける文化の全體と部分との關係を機能的なものとして分析するものであるが、マリノウスキーはこの點に關して「文化は慣習の遊離した堆積、人類學的珍奇物として取扱われざるべきではなく、相互に關聯せる生ける全體として取扱われねばならぬ。」と述べてゐる。

90. (Encyclopaedia Britannica, 14th ed., 1929, XX, p. 804.) エンサイクロペディア・ブリタニカは「文化は種族の全體として考察せらるべき固定されたもの」を以てする。 ("The Social Organization of Australian Tribes," Oceania Monographs, 1931, No. 1, p. 155.)
尙主題文藝は次の通りである。

Malinowski, B., Argonauts of the Western Pacific, 1922, Crime and Custom in Savage Society, 1926, Sex and Repression in Savage Society, 1927, The Sexual Life of Savages in Northwestern Melanesia, 1929, Coral Garden and Their Magic, 2 Vols, 1935, (この書は土着民の農耕活動よりその關係する習慣を觀察し「種々の組織とそれの發達と」の順序でその文化の発展の歴史を述べた。)
A Scientific Theory of Culture and Other Essays, 1941 年 Radcliffe-Brown, The Andaman Islanders, 1925, "Primitive Law," Encyclopaedia of Social Sciences; Richards, A., Hungry and Work in a Savage Society 1932.

(19) 田中徳治「東洋文化と西洋文化」第三卷「昭和十七年」。

文化 (Kultur, Culture) とは言葉は一般的に自然と對比する言葉である。その意味は土地の耕作 (cultura agri) から來たものといわれてゐるが、耕作するところとは自然に對して人力を加へることである。そして自然に對して何等かの人力が加へられなく限り、これは cultura, cultus とはなわれなくである。即ち文化とは人間になつてこられたものといふ意味である。

(20) McDougall, W., The Group Mind, 1921, An Introduction to Social Psychology, 1923 (1908)

(21) Freud, S., Über Psychoanalyse, 1910; Totem and Tabu, General Introduction to Psycho-Analysis, 1920, Massenpsychologie und Ich-analyse, 1921, 年。

(22) Allport, F., Social Psychology, 1924.

(23) Lynd, R., Knowledge for What? 1944, pp. 438 ff.

(24) Blumenhal, Albert, "The Nature of Culture", American Sociological Review, Vol. I, No. 6, Dec., 1936, Culture Consists of Ideas, 1936.

ブルメンタールは「文化は觀念の總體であるに過ぎないから、物質的文化は、決して直ちに物質的現象を意味するものでは

なら。物質的現象が文化になるのは觀念がそれに加えられたときに於てのみであり、従つて事物に對して觀念が加えられなければ、事物は最早文化ではなくなると主張する。併しこの種の見解は餘りにも觀念的であり、また有力でもない。

- (25) Blumer, H., "Social Psychology," Schmidt, ed., *Man and Society*, 1937, pp. 163 ff.
- (26) Ellwood, Ch., *Cultural Evolution: A Study of Social Origins and Development*, 1927.
- (27) Markey, J., "Trends in Social Psychology" Lundberg, Anderson, Bain eds., *Trends in American Sociology*, 1929, pp. 148-151.
- (28) 「超有機物」という言葉は、一八六七年、始めてメンサーによつて使用されたとわられてゐるが、その意義を人類學的に「層明瞭ならしめたものはメローキエである。」("The Possibility of a Social Psychology," quoted in Case, C. *Outlines of Introductory Sociology*, 1921, p. 36.)
- メローキエは、自然科學の研究對象は「無機的現象」であり、生物學のそれは「有機的現象」であり、「社會科學のそれは「超有機的現象」である」と述べたが、これは語句に於て「社會文化現象」(sociocultural phenomenon) であると思はれる。
- (Sorokin, P., *Society, Culture, and Personality*, 1928.) 同様の見解は、ムンローンやメ・ロイヤルにも見られるところである。(難波敏吉「文化社會學と文化人類學」九四頁参照)
- (29) Wallas, G., *Our Social Heritage*, 1921, *The Great Society*, 1914, 1921.
- (30) Ogburn, W. F., *Social Change*, 1922, Chap. I. ヲンキヤマン・キヤムは「社會的遺傳」(social heredity) という言葉を使用してゐるが、これは「社會的遺産」という用語よりも一層生物學的臭味が強い。(Kidd, B., *Science of Power*, Chap. X.) 社會的遺産という言葉が、文化を靜態的・固定的なものとする傾向に陥り易いから、必ずしも文化を敘述する用語として、適當とは考えられない。
- (31) Ellwood, Ch., op. cit., pp. 4, 27.
- (32) Durkheim, E., *Les règles de la méthode sociologique*, 1927.
- (33) 社會學研究會編「メ・ロキエ論」昭和六年。佐藤慶二「文化社會學」第一章、昭和十七年。
- (34) Mannheim, K., "Wissenschaftssoziologie," *Handwörterbuch der Soziologie*, Vierte Lieferung, 1931, SS. 460-661.
- (35) Weber, A., "Prinzipielles zur Kultursociologie," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 47, 1921, SS.

3 ff.

- (36) Spencer, H., *Principles of Sociology*, Parts III—VIII. クレンハーの社會學原理の大部分は社會制度の研究である。
 Hobhouse, L. F., *Social Development*, 1934, Chap. XI; Judd, C. H., *The Psychology of Social Institutions*, 1938;
 Hertzler, J. O., *Social Institutions*, 1926, "Social Institutions" Schmidt, ed., *Man and Culture*, 1937; Hamilton,
 W. H., "Institution," *Encyclopaedia of Social Sciences*, Vol. 8, 1933; Ballard, L. V., *Social Institutions*, 1936.
- (37) Wissler, C., *Man and Culture*, 1928, pp. 1—2.
- (38) Sumner, G., *Folkways*, 1906, 1913.
- (39) Durkheim, É., *op. cit.* Chap. I.
- (40) Malinowski, B., "Culture," *Encyclopaedia of Social Sciences*, Vol. 3.
- (41) 尾高邦雄は「キヌアムベエの社会史的及びの種の定義が「一番廣く採用されたものである」と述べ述べている。前掲「
 五七頁」。
- (42) Malinowski, B., *op. cit.*
- (43) Ogburn, W. F., *Social Change*, 1922, p. 4.
- (44) Ogburn, W. F., *Ibid.*, pp. 292—293.
- (45) Bernard, L. L., "The Family and the Development of Secondary Social Contacts", Wallis, W. and Willey, M.
 M., eds., *Readings in Sociology*, 1930, p. 413.
- (46) 尾高邦雄「前掲」一五一頁。
- (47) Kluckhohn, C. and Kelly, W. H., *The Concept of Culture, a mimeographed manuscript*, 1945, 雜波敘言譯「文化
 の概念」第二部「クラマツカオン」は、「文化は地圖のようなものである。恰度地圖が土地そのものであるのではなく、土地
 の抽象的表象であるように、文化もまた言葉、行爲及び人間集團の工作物に於ける劃一性への傾向を抽象的に敘述したも
 のに過ぎない」（前掲「五一頁」と述べ、また地圖が正確であつてこれを理解することが出来るならば道に迷うことがなくと
 同様に、文化を理解することが出来るならば、社會生活の仕方を理解することが出来る」と述べている。(Kluckhohn, C.,
Mirror for Man, 1949, pp. 28—29) 尚「Kluckhohn, C., "The Study of Culture", Learner, D. and Lasswell, H. D.,

eds. The Policy Sciences, 1951, "Values and Value-Orientations in the Theory of Action". Parsons, T. and Shils, E. A., *Toward a General Theory of Action*, 1951 に於て、シラマツクホーンの文化概念の最近の發展が見られる。

(48) ソローキンは、文化を (一)イデオロギー的文化 (ideological culture) (二)行動的文化 (behavioral culture) (三)物質的文化 (material culture) に分類してゐる。(Sorokin, P., *Society, Culture, and Personality*, 1947, Chap. 17.)

(49) 松本潤一郎、文化社會學原理、昭和十三年、昭和二十三年、四六頁。
マリノウスキーは、人類文化を分類する主要項目として、(一)物質的文化、(二)社會組織、(三)言語及び(四)精神的價値の諸體系を擧げてゐる。(Malinowski, B., *Sex and Repression in Savage Society*, 1927, p. 180.)

(50) Young, K., *An Introductory Sociology*, 1934, 1937, p. 22.

(51) Farris, E., *The Nature of Human Nature*, 1937, p. 97.

(52) 馬場敬治、組織の基本的原理、八九—二〇一頁、昭和十六年。

(53) Spengler, O., *Der Untergang des Abendlandes*, 1918, Bd. I, SS. 42 ff.

(54) ウェーバーによれば、文明は人間が手段として使用する社會的財産の總體であり、そのうちには觀念、組織、技術及びその他の様々の文化財が包含される。然るに文化は人間がそれ自身を目標として欲求するところのもの、即ち目的を對する手段としてではなく、目的そのものとして欲求してゐるところの凡てのもの、すなはち價値そのものの總體である。(Weber, A., *Ideen zur Staats- und Kultursoziologie*, S. 33; *Prinzipielles zur Kultursoziologie*, SS. 11 ff.)

マキイウツも、大體に於てウェーバーとその見解を等しくしてゐる。彼は文化は目的價値であるが、文明は手段的價値であると考え、價値的規準によつて兩者を區別する。文明は社會組織の全機構を包含するところの生活條件を統御しようとする努力に於て使用される全機構または裝備を意味し、文化は欲求されてゐる内在的價値それ自身を意味する。即ち文明は生活の手段または道具であり、文化は生活の目的または表現である。(Mackey, R. M., *The Modern State*, p. 325, *Society: Its Structure and Changes*, p. 236.)

(55) Woodard, W., "A New Classification of Culture and Restatement of the Culture Lag Theory", *American Sociological Review*, Vol. I, 1936, *Intellectual Realism and Cultural Change*, 1935.

附記。私はヒュー・モークターのウェンナー＝グレン財團 (Wenner-Gren Foundation) から獎學研究費を受け、一九

五一―五二年にわたり、ハーバード大学の社会関係學部に於て、社会人類學及び社會學を研究する機會を與えられた。この論文はその研究の一部をなすものである。